



光と影との  
円舞曲



時計屋

## 1 早起きは3人の得？

---

星河一真の朝は早い。

朝の5時には起きて、走り回ったり腕立て伏せしたり何だりするのが日課である。

今日も今日とて全力疾走していると。

「すみませーん」

唐突な声に足を止める。

振り向くと、今通り過ぎた辺りに一真と同じくらいの年頃の女の子がいた。見慣れた服装は、魔技学園の制服だ。

一応辺りを見回してみるが、誰もいない。これは明らかに、一真に声をかけたと見るべきだろう。

「俺に用？」

正面から見てみると、かわいい女の子だ。将来が楽しみである。やや目立つ点はと言えば、髪の色が若干薄い。茶色ではなく、灰色に近い。

「星河先輩、ですよね？」

「うん、多分」

先輩、ということは、中学生らしい。

「あの、わたし、ユキシロゲンというんですけど、ちょっとお聞きしたいことが！」

言葉の勢いのまま、一真の手まで握り締めてくる。

そんなに聞きたいことなのか。

「まあ、答えられることなら答えるけど」

「あの、後夜祭1日目の耐久ダンスの出場者って、分かります？」

後夜祭。

と言えば、この時期ならもちろん、1週間後に迫った魔技祭の後夜祭のことなのだろうが。

(イベント多すぎるんだよなあ、耐久ダンス……あったような気もするけど)

「もう決まっていたような気もするけど、覚えてないなあ。あ、そもそも大体そういうのって言うていいのかわからないや。冬に聞いて」

一真があっさり言うと、ユキシロゲンは驚いたように目を見開き、次に困ったように眉じりを下げた。

「分かったら、でもいいんですけど、だめですか？」

「うん。勝手に情報漏洩したらまずいからさ、やっぱり冬に言ってくれよ。あ、冬って流翔会長だけだ」

「し、知ってます！ 失礼しました！」

ぺこりと頭を下げると、女の子は走って去っていった。

(何なんだ?)

一真は首をかしげた。

一通り運動して家で朝食を食べたら、当然一真も学校に行く。自転車である。

今日も今日とて自転車を全力でこいでいると。

「すみません」

唐突な声にブレーキをかける。

振り向くと、たった今通り過ぎた辺りに一真と同じくらいの年頃の男の子がいた。すっかり見慣れた服装は、一真と同じ、魔技学園の制服だ。

辺りに他の人がいないわけではなかったが、男の子はまっすぐ一真めがけて歩いてくる。

「俺に用？」

正面から見てみると、かわいい、と言われてしまいそうな男の子だ。成長したら美形になるかもしれない。髪が灰色である辺りが珍しい。

(あれ?)

これはさすがに既視感を覚える。

「星河先輩ですね？」

早朝の女の子と違う点は、性別と、堂々とした口調くらいか。敬語ではあるが、この態度は何となく朔夜を思い出す。

「そうだけど……」

「僕はユキシロゲンというんですが、今朝方ユキシロゲンに会いませんでしたか？」

何だそれは。

「女の子なら、会ったよ」

「そうでしょうね。ところで、握手いいですか？」

「は？ 別にいいけど」

握手。

「では、僕についてどう思いますか？」

何故。

「敬語だけど、何となく偉そうなよく分からん奴」

正直に答えると、ユキシロゲン2は頷いた。

「そうですか。では、失礼しました」

綺麗に頭を下げ、男の子は歩いて去って行った。

(おーい、何なんだ?)

一真はまたも首をかしげた。

冬朔夜の朝も早い。

食堂やら登校の途中やらにあまり人に会わないようにするためである。遅刻寸前の波に巻き込まれようものなら、体質的に倒れるしかない。

そんなわけで、朔夜はかなり朝早くから登校し、流翔魔技会会室にいる。ちなみに、遅刻しそうなときには会長権限で量の緊急転送室を利用させてもらうのだが、一般生徒には秘密である。

一真もそれくらいのことは知っていたので、登校して会室に直行した。

「おはよー!! 今日も元気かー？」

「君ほどではないよ」

朔夜は朝から仕事していた。魔技祭一週間前なのだから仕方がない。

書類整理くらい手伝ってやろうかと思ったが、見渡すと、書類が異常に少ない。

「そういえば、これは君に渡しておくべきだろう」

「何だ？」

受け取って眺めてみると、一番上に『魔技会の仕事能率向上に向けた暫定処置』とある。

「……で？」

「自分で少しは読め。まあ、簡単に言えば、書類を電子化しようという目論見だ。コンピュータも魔技会ごとに違う仕様になっているし、署名も、指紋認証やらパスワードの山やらでどうにかするらしい。とりあえず、1週間限定だが」

「1週間で……一番大変な時期じゃないか？」

「面倒になってきたのではないか？ 私も割と同感だが」

さらに、朔夜が差し出してくるフロッピーディスクが1枚。

「書類の受信送信用のプログラムらしい。適当に入れておいてくれ」

「ほーい」

いつのまにか、コンピュータは一真の管理になっている。理由は、一番暇であることと、後は趣味だ。

適当にコンピュータにフロッピーを放り込んで、待っている間に、今朝のことについて軽く触れてみる。

「あのさー、今朝、ユキシロゲンとかいうのに会ったんだけど。しかも2人」

「ユキシロと接触したのか!？」

朔夜が書類を処理する手を止めて振り向いた。予想外の強い反応だ。

「何だよ？」

「君も名前くらいは知っているはずだが……、ああ、あった」

朔夜が違うコンピュータをいじってファイルを開く。

「白影魔技会情報……？」

タイトルを読み上げて、中身を見してみる。

会長　：行白　幻

副会長：行白　現

・

・

・

「おお！ これってユキシロゲンで読むのか？ 両方？」

「そうだ。ちなみに、まぼろしの方が女だ」

「あ、そうなんだ。男のほうが偉そうだったのに」

それにしても。

「俺、こいつらと会ったことないよな？」

「白影は中3だ。中学と高校では、大きな企画や合同企画も少ないからな。うちとの合同は、全体企画以外ほとんどないだろう。しかし、名前くらい見たことはあったはずだが？」

「いやあ、何て読むんだろうと思ってた。しかし、会ったことないのに何で俺が分かったのかなあ」

「魔技会の者なら、写真くらい簡単に手に入るだろう。第一、君はかなりの有名人だぞ」

「有名人？ 何で？」

思わず自分を指差すと、朔夜がため息をついた。

「副流翔が目立たないはずがないだろう？ しかも、ずっと空席だったわけだし。まあ、その辺りは私にも責任があるわけだが。それより問題は」

仕事の手を完全に止めて目の前にやってくる。珍しい。

「接触したのか？ どうなんだ？」

「へ？ 触ったかってことか？ 確かに2人とも触ってたけど」

「……それで？ 彼らについてはどう思う？」

そういえば、行白現の方もそんなことを聞いたな、と思いながら答える。

「2人とも、大人になったら美人になるんじゃないのか？ 男はちょっと偉そうだったな。ああ、そういや、あの灰色の髪遺伝？」

「あの髪はおそらく遺伝だが……、この様子なら、大丈夫か？」

「何が」

「そうだな……、ユキシロという言葉を知っているか？」

思わず、即座に画面の中の「行白」を指差す。

「違う。降る雪に代表のダイの雪代だ。辞典でも引け」

言われたので、コンピューター内にあるはずの辞典を引いてみる。

「雪どけの水？」

「それに関連してか、行白家の人間は氷が溶かせるらしい」

氷を溶かす。

「平和じゃないか」

魔技会長とは思えない。

「溶かせるのが氷だけならな」

「？」

氷以外で溶かせるもの……何だろう？

「心が溶かせるらしい。接触で」

心を溶かす。

「はい、冬先生。よくわかりません」

「少しは自分で考えたまえ、星河君」

ファイルでパソコンと叩かれた。書類が詰まっているのでそれなりに痛い。

「つまり、嫌いだったはずなのにいつのまにか好きになってしまう、ということだ。一言で言

えば、魅了だな」

結局教えてくれる辺りは、けっこう親切である。

「でも、俺別にあいつら好きじゃないけど。嫌いでもないけどさ」

「それが一般的な初対面の人間に対する感情だろう。彼らの能力にも制限がある。まず、元から溶けているものは溶かせない」

「なるほど。元から好かれてる場合には関係ない、と」

頷く。

「さらに、名前由来であるせいか、相手の名前にも縛られる」

「？」

わざと分かりにくい言い方してないかこの男。

「つまり、溶けるような文字や意味が名前に入っている場合、彼らに接触されても平気なわけだ。例としては、火、日、熱、春。あとは水とか海とかもそうだな。河はかなり微妙な所だが」

「お前は？ 冬とか夜とか、凍りそうだけど」

朔夜は肩をすくめた。

「意図して近寄ってきて、私にわからないと思うのか？ 魔技会のメンバーには大概効かないさ。春宮もな」

「ああ」

何せ、春という字が2つも入っているのだから。

と。

「あれ？ 春宮って本名じゃないんだっけ？」

そういえば日本人どころか地球人でもないはずだし。

「本名にもそんなような意味の言葉が入っているから、ああいう風に付けたんだ」

「ああ、そうなんだ」

(あれ？)

「付けたんだって……、もしかして、日本人の名前付けたのお前なの？」

「ああ、役所が日本国籍取るなら日本風の名前にしろと言うから」

「そうじゃなくて、……えーと」

「ああ、希望者には日本国籍を強奪することになるから、日本風の名前を持っている者も多いよ。魔技では本名を名乗っている場合も多いが、春宮のように発音しにくい場合は、無理に近づけるより、全く違う名前がいいと言う者もいるね」

「ふーん」

道理でどう見ても日本人ではないのに日本人のような名前を名乗っている生徒がいるわけだ。

キーン コーン カーン コーン

予鈴だ。

「お前、のんびりしすぎじゃないか？」

「この前の小テストで上級問題を解いたから、数学は1ヶ月授業免除だ」

「あっそ」

走って教室に着く頃には、一真の頭の中から行白兄弟のことは消えていた。

## 2 同じ穴の会長やら副会長やら

---

20分というのは意外に長い。

そんなわけで、2時間目と3時間目の間の20分休みに、朔夜は大抵魔技会室で仕事をしている。現在書類が電子化されているから、メインコンピューターの電源を入れないと仕事にならない

電源ボタンを押した。

待つ。

起動しない。

「？」

配線などを確かめてみるが、問題なし。そもそも、1時間目には自分が支障なく使っていた。休み時間に引き上げて、その時に。

(星河か)

彼とすれ違った。

それにしても、何かいじるのなら報告してほしい。

即座に仕事をするのはあきらめて、一真に聞こうと教室に戻る。

しかし、一通り見渡してみてもいない。

朔夜は、クラス内で唯一と言ってもいい、普通に話しかけられる相手の元に行った。

「春宮、星河を知らないか？」

「知らない」

彼女の答えは簡潔に過ぎる。朔夜はため息をつきたくなった。周りは問題児ばかりだ。もちろん、自分も含まれるのだろうが。

「そういえば、前の休み時間に、星河がコンピューターをいじっていたぞ」

「だろうな。動かなかった」

それは既に知っているのだ。

「電源部分に数字ボタンのパネルをくっつけていたようだ。うまく番号を打てば起動するようになるんじゃないか？」

それは新しい情報だ。が。

「番号は？」

「わたしは知らん」

ああ、簡潔だ。

「が、暗証番号は何がいい、と聞いてきたので、できるだけ魔技から遠いものにしておけ、と言った」

情報は増えたが、あまり役に立たない。

「それで、本人はどこに行ったんだ」

「それは知らないと言っている。だが、根拠のない勘でよければ答えよう」

「勘？」

何となく不安だが、聞いてみることにする。

「行白の話をしたんだらう？ 星河が言っていた」

「ああ、したが」

ここで何の関係があるのだらう。言葉にならない不安がつゆる。

「なら、中3のところじゃないか？」

会話の流れからは読めた展開だが、朔夜は反射的に否定しようとして詰まる。否定する理由はない。だが、肯定する理由もないはずだ。

「何故だ？ 彼らのところに出向く理由がない」

「まあ、お前にはなくとも星河にはあるかもしれないし。根拠はないと言ったはずだらう？」

それはそうなのだが。

反論をあきらめて朔夜は春子に背を向ける。

「他の校舎まで行くのか？ 暇人だな」

「忙しいのだが、仕事にならなくてね」

言い捨てると、朔夜はI年S組の教室を出た。

魔技学園の校舎は全部で7つ、まとめて1つの大きな敷地内にはではなく、近所に点在している。特別棟以外の6つにそれぞれの学年がおり、それぞれの敷地内に食堂や購買部などの一通りの施設があり、寮もある。寮には6学年いるが、寮生は6分の1の確率で、敷地から出ずとも問題なく生活を送れるわけだ。

流翔寮生である朔夜もその1人である。それは運ではなく権力によるのだが、結果としてはどうでもいい。

もちろん、魔技会長である朔夜は他の校舎をしばしば訪れる。しかし、仕事による場合はやることをやって帰ればよいのであって、実は、敷地の外や他の校舎の中をじっくり見たことはあまりない。

外に出るときに用心のため紋証を外し、白影校舎に入る。紋証をしていないせいか、誰も朔夜を見とがめない。他の校舎に来ると、いつも新鮮な気分になる。

今回はそれどころではなかったので、さっさと中学3年s組の教室に向かう。

s組の外の廊下、見たことがない人々が行きかう中、すっかり見慣れてきた少年と、親しいわけではないが半年でそれなりに見知った少女を、朔夜は簡単に発見する。

足早に歩み寄ると、少年の方が先に気づいて手を挙げた。

「よう、冬。こんなところでどうしたんだ？」

「それはこっちのセリフだ」

ため息混じりに返す。

少女のほうに目をやると、彼女は目に見えてびくりとした。

<流翔先輩だ、ええと、ええと、どうしよう。ああ、まずはあいさつを>

「こ、こんにちは」

頭を下げられる。



「丁寧にどうも、白影くん。うちの副会長を借りていってもいいかね？」

「う。に、睨んでる？」

「そんなつもりはないのだが。」

「それでも訂正はせず、一真を連れてその場から離れる。」

「何だよ。せっかく話してたのに」

「そもそもは、君のせいでコンピューターが使えないのだが」

「……ああ。あれか。だってハッキングされたからさ」

その言葉に、眉根が寄るのが分かる。

「ハッキング？ 古降谷先輩が最低限の防御はしているはずだが、足りなかったのか？」

「ちょっとプログラムだけじゃ危ないかもって気がして俺が手出した。でも、いない時にアクセスされても困るから、とりあえず点かないようにと思って」

「それならメモでも残しておいてくれ。仕事に差し支える」

「あ、悪い。でも、パスワードは大したもんじゃないよ」

「待て」

こんな所で口に出すな、と言おうとしたが遅かった。

「アルゴの誕生日、の、逆順」

「(?)」

「アルゴ？ なに人だ？」

「斎の飼ってる犬」

「……」

一真の友人である斎は知っているが、その家族構成や、ましてや犬を飼っているかどうかなど知らない。

春子の言葉を思い出す。

(確かに、魔技と無関係か)

「まあ、具体的には会室で聞こう」

「そだな。一応、あとでネットワークから切り離したら電源は戻すつもりだったんだけど。今日中にはやるよ」

(やれやれ)

ここ2週間くらいで一真のコンピューターの腕は飛躍的に進歩したらしい。ただのバカではなく、興味の向かないことには力を入れないタイプなのだろう。

「そういや、よくここが分かったな」

「ああ」

春子との会話をかいつまんで話す。

「へえ、意外」

「春子が勘を持ち出すことが？」

「んー、まあそれもだけど、お前が、根拠のない勘にしたがってここまで来たことだよ。そんなに急いでたのか？ どうせ、この休み時間にはもう仕事する時間ないぞ」

急いでいた。というよりは。

(焦っていた、のか?)

わからない。心は読めるが、心理分析はあまり縁がない。特に自分のことは。

「行白には接触するなど言わなかったか？」

「言っていないよ」

間髪入れない反論。

自信がなくなって、朝の会話を思い浮かべてみる。

そういえば、春子の名前の話などになって、嚴重注意はしなかった気もする。

「じゃあ、これからは気をつけてくれ」

改めて言う。

「何で？ 俺には効かないんだろ？」

「『河』は微妙な所だと言っただろう」

「でも、現に効かなかったんだろ？」

「……君は自分の力を自覚すべきだ」

「？」

言うと、疑問の視線だけが返ってくる。これは、分かっていない。

辺りに気を配り、心持ち声を落とす。おそらく、新しい副流翔の能力を知っているものはいまい。だからこそその用心。

「今日は効かなかったかも知れないが、明日は分からない。そういうことだろう？」

一真は首を傾げて、一応考える素振りを見せた。しばしの間。

「今日の能力が、えーと、反能力か。そういうのだってことか？」

「そういう可能性もある、という話だ」

頷くと、一真は2、3度拍手した。

「おお、頭いいなお前」

「おそらく、君よりはな。分かったか？」

「まあ、要は接触に気をつければいいんだろ？」

分かっていない。

「接触と言ったのは、物理的接触のことではなくて、つまり、会うなということだ」

「何で」

「見た目がどうであろうと、魔技会長と副会長だ。警戒するに越したことはないし、のこのこ相手の本拠地に来ることもない」

一真は軽く首をかしげた。

「それってもしかして、心配してるのか？」

心配。

「大丈夫だって、どうせ教えろって言われたって、機密なんてろくに把握してないから」

「機密の一つや二つ、どうでもいい」

反射的に口に出る。

と、一真が苦笑した。

「分かってるよ。俺を、心配してくれてるんだろ？ でも、多分大丈夫だって」

「何を根拠に」

「お前の心配にも大した根拠はないだろ？ お前多分心配性なんだ」

「君は多分、楽観的に過ぎる」

「そうかな。あいつらはきっと、お前と同じなんじゃないか？」

また不思議なことを言い出した。

「私と？」

もちろん、魔技会役員だという点や、精神系の能力を持っているという点ではそうかもしれないが。

「多分、友達が欲しいんだよ」

一真は言う。だが。

「彼らは私とは違うよ。見るときは大体人に囲まれているし、魔技会のスタッフも恵まれているようだ」

「ほほう。俺や春宮じゃ、恵まれているとは言えないってわけか」

反論に、少し慌てる。

「そういう意味じゃない。主に数の問題だ」

訂正すると、一真は素直に頷く。

「確かに仕事は楽かもな。それで？」

「それで？」

どこが、自分と同じなのか。

「お前だって、どうにか人を連れてくることくらいできただろ？ しなかったのは、欲しかったのが人材じゃないから、じゃないのか？」

確かに、それはその通りだ。

「周りに人がいるからって、友達とは限らないだろ。そういうことだよ」

自分は能力を公開して、わざと壁を作った。彼らは？

「あ、ちょっと待て。用があるんだ」

玄関まで来て、一真は出口に向かわず案内用の端末に向かう。

端末は比較的新しい物で、確か、今年度の頭から配備されたはずだ。校舎案内や、他にも魔技学園の簡単な情報が載っている。公開情報は、各校舎の魔技会が管理しているはずだ。

一真は、自分の小さなコンピューターを取り出して、コードでつなげた。しばらく操作した後、引き抜く。

校舎案内の画面が一瞬、ブラックアウトして、数秒後、何もなかったかのように復活した。

「さ、帰ろうぜ」

「何をした？」

「お返し」

副流翔は不敵に笑う。

「何の」

「ハッキングの元、白影魔技会のコンピューターだったんだよな」

軽く口にする。軽すぎて聞き逃しそうになるが。

この端末を管理しているのは、白影魔技会だ。もし、多重のセキュリティをくぐり抜けることができるなら、逆に白影魔技会までたどることも、できなくはない。

「あとは、あっちが電源入れたときのお楽しみってことで」

足取り軽く門から出て行く一真。

朔夜はその後ろ姿を見ながら思った。

(案外この男、魔技会役員に向いてるんじゃないか?)

本日何度目とも知れぬため息をこらえて、朔夜は帰路を急いだ。

### 3 ご近所は伝説の始まり

---

「おおー、夕焼けだー」

校門から出て、一真は思い切り伸びをした。

書類が電子化されると、効率は上がるのだが、コンピューター関連の作業は増えるわけで、当然一真のやるが増えることになる。

ハッキングも度々あるし、疲れることこの上ない。日が暮れる前に下校できることがむしろ幸運なのだろう。

(もっと魔技祭に近くなったらどうなるか……考えたくないなあ)

そんなことを思いながら、自転車に乗ってしばらく走らせる。

「明日は天気～♪ それもまた良し～♪」

即興で歌いながらスピードを下げる。家までもう少し。住宅地に入れば道幅は狭くなる。

と。

「こんにちは」

急ブレーキ。

声の飛んできた方を見ると、予感通りの人物が立っていた。根拠のない勘でもけっこう当たるものだ。

「よう、シロ。副白影なんだって？」

「シロってなんですか、副流翔？」

「だって、両方ユキシロゲンじゃ、区別付けなきゃまずいだよ。お前の方が後に会ったからシロ」

1歳年下の少年が歩み寄ってくるのに合わせて、自転車を降りる。

「別に白影、副白影で呼べばいいでしょう。家はこっちですね？」

現が先に立ったので、一真も自転車を転がして続いた。

「立場で呼ぶの好きじゃないんだよ。よく俺の家なんか知ってるな」

「有名人ですから」

「勝手に有名人にされてもなー」

「近所でも有名ですよ」

「向かいの福蔵じいさんよりは有名じゃないぞ」

「そりゃ、野生の熊を素手で倒して手なずけて飼っている老人は有名でしょうとも」

「お前、詳しすぎないか？」

少し不気味に思って聞いてみる。

と、唐突に現は立ち止まった。

「流翔会長に伝えてもらえませんか？ お返しをご丁寧にどうもありがとうございます、と」

「？ お返し？ お前、あいつに何かあげたのか？」

「それだけでもしもおわかりでないようなら、コンピューターの話だと言ってください。では」

言い捨てると、現は横の民家の門を開けて入ってしまう。

「え？ ちょっと待てよ。コンピューターって……」

「ごきげんよう」

バタン

玄関のドアを開けて彼は家の中に入ってしまった。

「コンピューターで、冬が奴に何をあげたって？」

人の家の玄関先で考え込む一真。

「……もしかしてあいつ、俺の反撃、冬がやったと思ってるんじゃない……」

それは誤解だが、訂正する間もなく彼は去ってしまった。

「ん？」

よく見ると、壁と同系統の色で分かりにくいのが、表札があった。

不軌

行白

「ここが家え？」

歩く。

隣が幸村、生野、角を曲がって木里、星河。

「ご近所かよ……。気づかなかった」

福蔵じいさんの話を知っているはずだ。

「やっぱり、近所づきあいは大切だなあ」

若くして悟る一真であった。

ジリリリリ

星河家、夕食中。けたたましく鳴り響くベルの音。

「……姉ちゃん？」

基本的に、食事中は席を立ってはいけない。

「放っておきな。用があるなら後でもかけてくるだろ」

「うん……」

しかし、気になるので、いささか食べるスピードを上げる。

しばらくして、電話は沈黙した。

食事の音だけが響くようになって。

ピリリリリ

今度は電子音が鳴った。音源は、一真の鞆の中だ。

「何だい、あの音は」

「えーと、コンピューターはあんな音立てないだろうし。あ」

ぼん、と手を打つ。

「冬にもらった電話だ。持ち運べるやつ」

「そんな番号、どいつが知ってるって？」

今日の食事当番は、一真でなく、水連なのであった。食べ終わるまで、席を外すに外せない。

「ええと、冬と、斎かな。姉ちゃんには言おうと思ってたけど言ってなかったな」

「出てもいいよ」

「え？」

意外な言葉を聞いたので、一真は目をしばたかせた。

「あたしは伯母さんほど厳しくはないさ。まあ、一週間くらい当番代わってもらおうけど」

食卓の不文律を作ったのは一真の母である。今は海の向こうだが、破るのは勇気がある。不文律とはそういうものである。

しかし、一真は従姉妹の言葉に後押しされて席を立ち、鞆から例の物体を引っ張り出して電子音を止めた。

「もしもし？」

『一真？』

予想外の少年の声が聞こえた。何となく、朔夜の方だと思っていたのだ。

「斎？ こんな時間にどうしたんだよ。夕食中だぞ」

『今学校なんだけど』

この友人も、人の話を聞かない時には聞かない。

『冷蔵庫があったの覚えてる？』

「給食用の？」

斎の高校は、一真が一学期に通っていた学校でもある。

『そう。冷凍室もあったよね？ ところが、何か非科学的な暴走してるんだけど』

「非科学的？」

『超心理学的？』

わざわざ言い直してくる。

「いや、言い方の話じゃなくて、どういうことだよ」

『つまり、いろいろ凍りついちゃって、出られなくはなさそうだけど、人がいない今のうちにどうにかしておいた方がいいんじゃないかなあ、というのを校長に言ってみたわけ』

「で？」

『こういうのって魔技系でしょ？ どうにかしてくれない？』

単刀直入だ。が。

「校長はどうなったんだよ」

『ああ。報酬は彼が払ってくれるだろうって話。でも、校長から魔技に連絡して誰か派遣してもらってまどろっこしいから、僕の方から魔技の人に連絡しますって言ったわけ』

「お前も、何考えてんだかなあ」

『そう？ 朝になる前に解決していれば口止めする人数は減るわけだし、僕は校長に恩が売れるわけだ。めでたしめでたしだね』

「はいはい」

荷物をまとめながら、ふと気づく。

「氷関係なのか？」

『そうだよ』

「分かった。とりあえず、しばらくしたら着くよ」

『よろしく。寒いから』

電話は切れた。

「姉ちゃん、行ってきます！」

「はいはい、行っといで。世の中、金とコネより、義理と人情だからね」

「りょうかーい」

さて。

一真は微妙に満たされない腹を抱えて、まだ暑さの残る夜風の中を走り出した。

帰ってきたら、残りの夕食を必ず食べよう。

ピンポン

チャイムを鳴らしてみると、意外に普通の音が響いた。

しばらく待つ。

……。

ピンポン ピンポピンポピンピンポン

押しまくってみる。

「やかましいわよ！」

怒鳴り声とともに勢いよく開く扉。

出てきたのは知らない少女である。

「あら、副流翔じゃない」

「へ？」

「ああ、隣のクラスなんだけど、そっちは知らないわね。何か用？」

どうやら同じ学校の、しかも同じ学年の生徒だったらしい。

「ここに、行白ゲンて奴がいるだろ？」

「うつつの方でいいの？ そっちしかないけど」

「おう」

「現ね。何か機械いじってたけど、まあ呼んでくるわ」

待つこと数十秒。

「何ですか、副流翔」

「よう、こんばんは、シロ」

「その呼び方は犬みたいだからやめて下さい」

「出かける準備をしてくれ」

とりあえず、要件だけ告げてみる。

「はい？ 何故ですか。簡潔に理由を述べて下さい」

片割れと違って、挑戦的な態度である。

「困ってる人がいるから」

「……具体的に述べて下さい」



簡潔に述べたのに文句を言われた。

「向こうの、空代中学って知ってるよな？ あそこが凍ってるんだって。だから、行こう」

「だから、が飛躍しすぎです。その槍はそのせいですか？」

家にあった武器を適当につかんできたため、一真は槍装備である。まあ、今更近所を槍持って走ったからといって、福蔵じいさんの評判を凌ぐことはできまい。

「そうだよ」

「僕が行かなければいけない理由がありませんよ。正式に依頼が来たわけでもないし」

「そこは齋の顔を立ててやってくれよ」

「誰ですかそれは」

「俺の友達」

「知りません」

「うーん」

困った。目の前の少年は義理と人情では動いてくれそうにない。

齋の言葉を思い出した。

「そうだ。俺に借りが作れるし。どう？」

「そうですねえ」

(お、少し効いた)

齋と重なる部分があるのかもしれない。

「そうだ。夕方のお前の伝言。あれで、お前が勘違いしてることを教えてやるよ」

「……勘違い？」

「そう」

割と致命的な間違いだ。

「わかりましたよ。少し待って下さい」

言い置いて現が引っ込んだ。説得成功である。

齋の通報から約5分。

(中学まで飛ばして8分か)

一真は計算して、何となくいらぬような気もするが、友人の無事をどこぞの神に祈っていた。

## 4 人を見たら友達と思え

---

そんなわけで空代中学。

校門前に自転車を止めて、槍を脇に挟んで懐中電灯を構えて、いざ突入。

と。

「何やってんだシロ。置いてくぞ」

現が自転車を降りてしゃがみこんだまま動かない。

「スピード出しすぎです」

「普通だよ」

「普通じゃありません……」

「それにしてもいい涼しさだなー」

運動して汗をかいた身には心地よい。

「どちらかというとも寒いと思いますが。まあ、行きますか」

ようやく落ち着いたのか立ち上がる。

「行こう行こう」

校門は当然のように閉まっている。しかし、申請さえすれば居残りはできるので、通用門は開いているはずだ。

手をかけて。

「冷て」

門は金属である。手袋も用意すべきだったかと思いながら開ける。

「発生源とかは分かっているんですか？」

「冷凍室だったと思うけど。その前に斎だよ斎。通報者」

電話があるのは購買だけだったはずだ。怪しい記憶の糸をたどりながら購買に向かう。

「あれ。いない」

購買部に人影はなかった。例の電話の前にも誰もいない。

「おかしいなあ。電話使えるのここだけのはずなのに」

「今もここにいるとは限らないじゃないですか。これだけ寒いなら、1ヶ所に暖房でも付けて避難していると考えた方がいいんじゃないですか？ 大体、電話なら職員にもあると思いますよ」

後輩が頼もしい助言をくれる。

「おお、お前頭いいな」

「僕は頭が痛いです」

職員室に向かってみる。懐中電灯の明かりだけで部分的に現れる学校というのは不気味なものだが、魔技生2人には何ら恐怖心を与えなかった。

「寒いですね……」

荷物の中から上着を出して着る現。

「さっきよりはな」

冬も半袖で過ごす一真は気にしない。

目当ての職員室には明かりがついていた。

「ちわーっす。魔技のお届けで一す」

勢いよくドアを開ける。

「それ、違いますよ絶対」

後ろで文句を言う後輩は無視。

職員室の中には、教師らしき大人が1人、生徒らしき少年が2人。夏場に似合わないストーブのそばで、軽く毛布を肩にかけている。

「お、斎。元気か？」

「ちょっと寒いけどね」

生徒の中の1人が答える。

一真を見て、斎を除いた2人が驚いた反応を見せたが、一真と目が合うと反応が別れた。目をそらす生徒と、口を開く教師。

「星河か？ こんなところで何をやってるんだ」

一真は、それが習っていた体育教師であることに気がついた。

「何って、この異常気象を……うお」

正直に言おうとしたら、後ろから小突かれた。

「何だよ」

「どうせ何もやる気がないんだったら、無関係を装っていた方がいいですよ」

小声で現が言う。

「何で」

「通りかかったら異常な寒さを感じたので、様子を見に来ただけです」

現は一真の言葉は無視して横から顔を出し、ついでに一真の槍を見えないように廊下に転がした。

「君は……？」

「彼の後輩です」

いぶかしげな教師の声を一刀両断する現。

「ここ、先輩の前の学校なんですか？」

「う、うん」

いきなり『先輩』などと言われて戸惑う一真。

「じゃあ、僕は帰りますのでごゆっくり」

現はそのまま立ち去ろうとする。

「おい、待てよ」

「どうせ任せるつもりだったんでしょう？ 適当に解決して帰りますから、ごゆっくり。あとでこれはお返ししますよ」

槍まで抱えてすたすた行ってしまう。

(どろぼー)

叫ぶかどうか迷ったとき。

「一真、寒いから閉めて」

絶妙のタイミングで齋が言う。

「え、いや、えーと」

「閉めて」

重ねて言われたのでとりあえずドアを閉め、中に入らざるをえなくなる。

部屋の中の3人の視線を一身に集めて、一真は少し困った。

寒風吹き荒れる外とは対照的に、職員室の中はストーブのため、どちらかと言えば暖かい。

しかし、一真に向けられる視線は暖かいものばかりとは言えない。何かを期待するような目、観察するような目、そもそもこちらを見ていない目。

(齋だけだと思ったのになー)

予想はできたかもしれないが、電話で齋は一言も口にしなかったため、他の人がいるなど思ってもみなかった。特に知り合いなどは。

視線をさまよわせてみると、また先ほどの生徒が目をそらした。

(木島か)

名前も知っているし、話したこともある。

「毛布いる？」

齋が聞いてくる。

「いや、そこまで寒くないし」

現と、おそらく齋も気を利かせてくれているのだろうが、困る。

「いやあ、それにしても、これでも寒くないとは相変わらずだな星河」

「石原先生だって半袖じゃないっすか」

体育教師石原は、齋たちと一真を見比べた。

「いきなり転校して驚いたが、お前らまだ付き合いあるんだな」

仲良きことはいいことだ、と勝手に納得して頷く石原に、一真は珍しく曖昧に頷いた。

「まあ、あるようなないような」

齋とはあるが、木島とはない、というのが正しいだろう。

一真は、少しだけ勇気を出してみた。

「えーと、木島、元気か？」

話しかけてみると、木島は目をしばたかせ、慌てて頷いた。

「う、うん、まあ」

顔はこちらに向けたが、目はこちらを見ていない。

「えーと、クラスの他の奴とかも」

「元気だよ」

打ち切るような返事。

と、視界に違和感。

外に顔を向けると、白い物がすごい勢いで視界内を横切り、時に窓を叩いていた。

「げ。雪？」

「というより、吹雪かなあ」

齋が要らない補足をする。

「星河、何でここにいるんだよ」

木島が初めて、自分から話しかけてきた。

「何でって、さっきシロが言った……」

のとは微妙に違うが、この騒ぎを聞きつけてやって来たことには変わらない。

「本当は、もっと前からいたんじゃないか？」

うめくように、木島が続けた。

「木島」

齋が制止するように声を上げた。

「この騒ぎはお前がやったんじゃないのかよ!？」

「木島！」

かつての同級生は声を荒らげ、こちらを睨みつけたが、齋に止められ顔ごと視線を外した。

「しばらく何もなかったって言うのに、今更、嫌がらせかよ……」

呟く声を、一真は呆然と聞いていた。

「木島一、星河は校庭の木を引っこ抜くことはできても、気候をいじることはできんぞ」

呑気な石原の声。

「木島、一真はちょっと前までこんな事態になっているのを知らなかったんだよ。大体、一真は進んで人を困らせたりしないだろ」

諭すような齋の声。

「どうだか。さっきの後輩だってどこの化け物なんだか怪しいもんだぜ」

「木島」

一真は、そこでやっと声を出すことができた。

「俺はともかく、いきなりシロまで化け物扱いするのはやめろ」

「じゃあ、お前が化け物だってことは認める……」

木島の言葉は、物理的に中断させられた。

吹き飛んだ木島の体が、机の一つをなぎ倒した。

「うわ、何するんだよ、齋！」

「その体勢から人一人投げ飛ばすとは……。見かけによらないな、碧谷。柔道部に入らないか？」

」

全く関係なくいきなり勧誘する石原を放っておいて、一真は木島に駆け寄った。

「おーい、木島。大丈夫かー？」

「いててて……」

木島は、頭を振りながら身を起こした。

「一真本人が怒らなくても、僕が怒るよ、木島」

穏やかに言い聞かせる齋だが、声が怖い。

「雪もやんだみたいだし、帰ろうか、一真」

齋はそのまますたすたと歩いて、ドアを開ける。

言われて見ると、確かに窓の外は静かなものだし、気温も心なしか上がっているようだ。現がどうにかしたらしい。

「待てよ、齋」

少し迷ったが、追いかけることにする。ここにいてもどうしようもない。

「おお、星河。何だか知らんが、柔道部はいつでも強者を歓迎するぞ」

「ははは、ありがとうございます」

苦笑しながら礼を言う。

ドアの外で待っていた齋の元に向かう。

「……ごめん、星河」

小さな声が聞こえた。

一真は立ち止まる。

一瞬、考えて。

「……じゃあな」

出てきたのは、許しではなく別れの言葉だった。

「ごめん、一真。あんなつもりじゃなかったんだけど」

齋から同じ言葉を聞いて、一真は苦笑した。

「別にお前が謝ることじゃないだろ。でもまあ……」

「まあ？」

「魔技に入ってからとはともかく、冬は小学校とかで苦労したんだらうなって思った」

「……そうだらうね」

肯定以外でできなかった齋に、一真は場の空気を変えるべく、声を明るくした。

「ま、今度はあいつの家にでも押しかけてお泊まり会でもやろうぜ。この前みたいな大騒ぎ」

「そんなに騒がなくてもいいと思うけどね。それじゃ」

Ｔ字路で別れて家へと向かう。おなかがすいた。

(冷めてるかもしれないけど、夕食は食える。うん)

と、満腹への障害が少年の姿をとって星河家の門の前に現れた。

「シロ、槍返せよ。泥棒」

「その前に、約束のものがあるでしょう？」

何のことかと一瞬首をかしげ、勘違いを教えると言ったことを思い出す。

「ああ。うちのコンピューター係は冬じゃなくて俺だって話だよ。バーカ」

少しやさぐれているので、返答がぞんざいになる。

「……本当ですか？」

「もちろん、基本は結梨さんがやってるけど、細かいカスタマイズは俺がやってるよ。用がそれだけなら、俺はとっとと食って寝るぞ」

納得の行かない様子をしていた後輩だが、ひとまず気にしないことにしたらしく、違うことを

口にした。

「そういえば、昼は姉がお世話になりました」

「ああ、あっちが上だったんだ。お世話も何も、話をしただけだけど」

「幻が言ったことを当てましょうか？ 『冬先輩はずるい』」

「いや……そこまではっきりした言い方じゃなかったけど」

趣旨としてはそんなものだ。

「能力を隠したり利用したりして友人を作るのは論外として、能力が効かないという理由だけで友人を選ぶのもおかしいんじゃないか。そんなところですか？」

「えーと、他の奴の会話をお前に話さなくてもいいと思うんだけど。ほら、プライバシーの問題ってやつ」

ノーコメントの態度をとった時点で、肯定しているようなものだが。

「何となく吹っ切れた様子だったので、その答えはもらえたんでしょうね。何て言ったんですか？」

目が真剣だ。

「大したことを言ったわけじゃないけど。友達になる時って、そりゃあきっかけはあるかもしれないけど、きっかけはきっかけでさ。そんなことはどうでもいいんじゃないか？」

「どうでもいい？」

「最初は、席が隣だったとか、班が同じだったとか、どんなことで話すようになったって、別に何だっていいんだよ。能力が云々でも。大事なのは、その後の誠意だろって、話」

「誠意？ そんな一言で片づけますか？」

「つまり、少し距離が離れたときに、また踏み出す気があるかどうかってことだ。お互いにそういう気があるなら、ずっと友達でいられるだろ。片方じゃだめだろうけど」

それが、斎や朔夜にはあって、木島にはなかったものだろう。

「ま、がんばれよ」

先輩風を吹かせて、すれ違いざまに上から頭など叩いてみる。

「勘違いしているようですが、僕にだって友達がいらないわけではないですよ。……水城とか、熱田とか」

水に、熱か。

「魅了しないことがわかっているからって、馴れ馴れしすぎるんですよ、彼らは。対処に困ります」

言葉はともかく、口調に非難は宿っていない。

(照れ屋だなあ)

口には出さず、納得しておく。

どうやら、幻の方は友達にしていいかで悩み、現の方は既に友達になってしまったことで悩んでいたらしい。

「気楽に行こうぜ。どうにかなるって」

悩むのは若者の特権だが、悩みすぎるのも困りもの。

そういうことだろう。

翌日。

一真はコンピューターと格闘していた。

「あー、もう、シロの奴、まだ変なウィルス送りつけてきやがって」

「いつのまに副白影は犬のような名前を付けられたんだ？　そもそも、奴らには近寄るなど言ったのに」

隣で文句をつけてくる朔夜は無視。

「奴らが星河に手を出したおかげで近隣の学校にも迷惑をかけたし、最悪だ」

無視されても続ける朔夜の言葉に、一真は首をひねる。

「どういう意味だ？」

「ああ、知らないか。どうも、彼らの能力が効かなかった時には、周囲に変な影響を与えてしまうらしく、暑くなったり寒くなったりしてはた迷惑なことこの上ない。昨日はどこかの学校の氷の精霊が暴走したらしいし」

ということは。

「何が行かなければいけない理由はない、だよ。自分たちの責任じゃないか」

ぶつぶつ文句を言ってみる。

ついでに、ある作業を実行。

「どうした？」

「お前さ、耐久ダンスの仕事、面倒だって言ってたよな」

「それが？」

画面を流れる文字を眺めて、作業が終了したことを確かめて頷く。

「情報欲しがってたみたいだから、仕事ごと押し付けた」

告げると、さすがに朔夜はすぐに理解したようだった。

「待て。仕事に関する書類は、いくら電子化されているとは言え、両会長の承認が必要なはずで、その認識は何重にもわたって行われているはずだが」

「大丈夫大丈夫。認識システムをいじるんじゃなくて、向こうからその情報盗んできて適用するだけだし」

「そんな行動は問題だが……、面倒も減るし、仕返しにもなるか。まあいい」

一言で片づけると、朔夜も仕事に戻った。

こうして、忙しくも平和な日々は続くのである。